

データの洪水, モデルの渇水

日科技研 矢島 敬二

使いやすいデータであるかどうかはともかく、データはとめどもなくふえそうに思われる。観測データがふえ、観測可能なデータがふえ、蓄積されたデータがふえ、蓄積可能量がふえていく。これは悪いことではない。御同慶のいたりである。しかし、手ばなしで喜んでいればよいというものでもなさそうだ。データは洪水のごとくあふれるように思われる。無方針に、ないしは、いろいろな使い方を前提としないで蓄積されたデータは洪水のひいたあと、もはや利用可能性のひとかけらもなく消えさってしまいそうだ。

東洋には昔、竹簡と称される記録の道具があった。竹にはたくさんのは書けない。重要な情報をいかに圧縮して残すかということを考えなければならなかったという。現代にも、この心がまえば重要な意味をもつのではなからうか。

もう数年前のことになったが、その当時ですら地震解析のデータは磁気テープにずいぶんたくさんの量で保存されていることを知って驚いた。できるかぎり加工前の原始データを残すということになって、観測装置の普及とともに原始データがどんどんふえるのだ、とそのとき聞いた。その後そういう関係のデータがどのようにになったかは知らないけれども、やはり要約したデータを保存するというのもきわめて重要なのだと当時教わった。

それに反してモデルが不足しているということをつもりはない。モデルも洪水状態にあるということではなからうが、こちらの場合には洪水にも渇水にもなっていないであろうし、自分そのいづれかになるということもなさそうである。しかし対処すべき現実の問題にぶつかったときには、

データの洪水があり、モデルの渇水があるという意識をもつのではないか。

いまや30年も前になろうとするわけだが、日科技連から、フィリップ・エム・モース、ジョージ・イ・キンボル共著、“オペレイション・リサーチの方法”が昭和28年3月5日の日付で日本語として資料が出たとき、その記述に流れる問題解析の重さと迫りに圧倒された。日本が敗れて8年めのことである。学生として眺めたうえでの感想ではあったが、なるほど、これで敗れたのかという気持ちもあった。

そのあとでは、昭和39年の3月にみすず書房から出た、P.M.S. ブラケットの“戦争研究”に収めてある、オペレーショナル・リサーチの内容にえらく感銘をうけた。簡潔な内容でORのあり方を学ぶことができると思ったからである。

それからまた20年がたつ。3年ほど前に飛行機のなかで、かなり長時間にわたって分厚なペーパーバックを読んでいる人を見かけた。日本では長い通勤時間に本を読む場合には、カバーをかけて標題を隠す習慣があるが、幸いそれを読んでいた英語民族の人はそういうことをしていない。標題は大秘密戦争とあり、副題には、英国科学情報部1939—1945、とあった。空港で本を探すとすぐ見つかった。本はR.V. Jones, *Most Secret War*, 1979, Hodder and Stoughtonであった。ペーパーバックになる元の本は1978年に出ているようであった。飛行機のなかで、真似をして読むつもりで買ったのだが、700ページの厚みがあり、いずれ暇なときにとまって、写真をパラパラと見たにとどまるのだが、内容はなかなか面白そうである。索引には、オペレーショナル・リサーチもあればブラケット (P.M.S.) もある。

もしお読みになった会員があり、誤っていれどご教示をお願いしたいが、この本はORの実施の歴史の本としてきわめて有益であるように思われる。もちろん副題からおわかりのように主題はむ

しろ、レーダーであり、ロケット爆弾V2であり、原爆開発である。そのなかにドイツ爆撃機への対策、潜水艦対策があり、ORの記述が出るということである。しかし、前に挙げた2冊の本とは異なり、かれは生きた組織の歴史を述べている。組織図や組織論なしのOR組織論が歴史としてえがかれているといってもよい。

もっとも、第二次大戦中のきなくさい歴史であるし、かなり大部なものでもあるから、戦争を肌身で感じた世代でなければ、少なくとも日本では読まれないかなとも思う。

しかし、その点についていえば、飛行機のなかで週刊誌やら小説ではなく、こういう本を読んでいる人のいる国というのはこわいことだ。しかもこのペーパーバックはよく売れたのだという。

ORの作業をする人はスタッフがよいのだとかなり独立した機能をもった組織が同じ目的のために動かなければならないときにどうやったか、そしてどのように失敗したかも書いてあるように思われる。

ブラケットが出てくるところを拾い読みすると、ジョーンズはこの14歳年上のノーベル賞受賞物理学者の組織上の動きを必ずしも好意的には見ていなかったことがわかる。ブラケットはフェビアン主義者だったという記述もあるから、思想的な背景についての異和感もあったのかもしれないが、ずいぶん誤りが多かったという記述が出てくるほどである。

しかし、むしろ現実の世界に身をおくわれわれとすれば、組織のなかで大きな目的を掲げて働いたORグループに、栄光の歴史のみがあったかのような言い方を信用するわけにはいかないの、そういう意味では救われるのである。この本が出たのが1978年というのは、第二次大戦後35年であり、それ以前にはこういう歴史は語れなかったのかもしれない。

部分的にいえば、ORの手法は日本の軍部にも

なかったとは思われない。しかし、全体としてレーダーの開発に最優先開発順位を与えると、対ドイツ潜水艦対策に合理性を与えると、かいう仕事を組織的に行なうには、よき組織者があり、その組織者は合理的な理念をもっていたと考えることが可能であろう。

組織の問題は広がりつつある。日本と欧米との関係もますます複雑化しそうである。これとていろいろなデータはふえる一方である。世の中にあるモデルは無数であろう。しかし、現実のデータから出発するとき、モデルの濁水という感じはぬぐいえない。そこで、先のジョーンズの本の、次のようなことばが目についてくる。すなわち、ORを含めた科学情報活動、この言葉には諜報活動という意味もはいるが、これには“できるかぎり完全な人間の心が必要であり、観察し、記憶し、批判的に考え、他種類の情報と照合し、そして結果を表現しなければならないのだ”ということばである。そして、それは完全な心の持主1人1人の仕事でなければならない、と強調する。

これからのORが成功していくためには、古いやり方しかないというわけではなからうが、教示を汲みとれるなら、できるだけ汲みとらねばならぬ。データを観察し、モデルを考える。モデルを考えて、データを眺める。そして、組織としてその解析結果をうまく生かす道を探す。それ以外に道はなさそうに思うのである。

そしてまた、少し前のベストセラーであったジョーンズの本は、多少のひずみはあるにしても、歴史を知るうえで貴重なもののように思われる。少なくとも、数式やらモデル論のみが紹介されることが終るといえるのは、どこかおかしいということがわかるという意味でも、この本は重要でありそうである。